ー村史こぼれ話 13ー

矢作のくらし

①矢作の朝市

元友義信用組合(ゆうぎしんようくみあい)のあった付近の道路で行われた露天市場。戦時中の現金収入の道として、また今でいう地域活性化をねらって当時の人の発想から始まった。

当時は、吉田の八百屋が個々に矢作の家をまわって安く野菜を仕入れていた。いっそ地元でまとめて売ったらという事になり、矢作集落の前を流れる用水路の中央にくいを打ち、その上にバラックのような建物を立て、床を板張りにしてそこではじめた。

朝市が始まると主催者の威勢のよい掛け声とともにセリが行われて、吉田町から大勢の八百屋さんが競り落とすさまは活気にあふれていた。朝市が終わるとそこは子どもたちの遊び場となった。冬季以外は毎日行われた。

米以外、これといった収入のない時代、大勢の人たちが朝とったばかりの野菜をリヤカーで持ち込み、家計の助けにした。色々な世間話に花が咲き、社交の場ともなった。

②雪小屋

夏に氷などを口にすることができなかった時代に、暑い夏まで雪を貯蔵した施設。矢作の二本松の北側 300 ㎡くらいの土地に雪を積み上げて雪山を作った。

昭和 10 年代は今より雪が多かった。その頃、若者は軍隊へとられ、残された者は「銃後の守り」でいっしんに働いていた時代であった。

ソリに箱をつけて、一人が先に引き一人が後ろから押した。付近の田んぼから 20 台～30 台と雪を積んで運んだ。小学校の冬休みには小学生まで駆り出された。雪山が完成すると、その上に塩をたくさん撒(ま)き、丸太で屋根を組み、藁葺き屋根にして夏に備えた。

この手伝いで 25 銭もらったが、その小遣いを国のために国防献金にするようにと父からいわれ、小学校に持っていって寄付して、校長先生から賞状をもらったのを憶えている。

小学校の運動会や地域の催し等で雪から作ったアイスクリームを食べる事が当時は何よりの楽しみだった。

情報提供：半間喜男さん（矢作）